

はじめに

弘法大師空海は、『般若心経秘鍵』において、「五藏ごぞうの般若はんにかは一句いっくに賺あくんで飽あかず、七宗しちしゅうの行果ぎょうくわは一行いちごうに歡のんで足たらず。」と記し、『般若心経』には、仏教のすべての教えが含まれていると説いている。

『般若心経』の一般的な解釈は大乗仏教の「空」の思想を説いた教典とされているが、空海はそれだけでは飽き足らず、仏教のすべての教えが内包されていると言いつつ放ったのである。正に意表を突く発想である。

本稿では、空海の『般若心経』の解釈、『般若心経秘鍵』からみた「空海思想の包容性」と「密教の総合的な性格」について考察する。

『般若心経秘鍵』にあらわれる空海思想の包容性

『般若心経秘鍵』の「分別諸乗分」には、普賢菩薩の悟りを華嚴、文殊菩薩の悟りを三論、弥勒菩薩の悟りを法相、声聞と縁覚の悟りを声聞乗と縁覚乗の二乗、観自在菩薩の悟りを天台とし、それぞれ顕教に当てはめて、「舍利子、色不異空」から「無智亦無得、以無所得故。」の中に顕教が説かれていることを記し、「総持明分」には、顕教の教理と行果は、すべて秘密真言に帰入することを記している。

空海は、このような論理の展開で『般若心経』を密教経典と見なし、その中には仏教のすべての教えが内包されており、そして、すべての顕教が密教に帰入するとの解釈を加えたのである。

これが、『般若心経秘鍵』にあらわれる空海思想の包容性である。

密教の総合的な性格

『般若心経』は大乗仏教の空の思想を説いた教典である。しかし、空海は独自の論理展開により、『般若心経』を密教経典にまで昇華させた。

多神教の宗教は、そもそも異教を攻撃し消滅させるという性格を持ち合せてはいないが、異教の神々、儀礼、修法までもを摂取、内包するという傾向は最も密教において顕著である。

例えば、護摩の修法もそもそもはバラモン教の儀礼であったが、仏教の教理を当てはめ、意味づけを行い密教の儀礼として取り込んだ。また、インド古来の神々を仏教の菩薩や明王も天部の尊として取り込んでいった。

このように密教には、異教を排他するのではなく、雑然と取り込んだ後に、矛盾のない理論を展開し、自らの教えの中に再構築する性格を本能的に持ち合せていたのである。言うなれば、この密教の性格は、既にあるものを否定し排除するのではなく、それらを再配置し再構築するというところに重きを置くのである。これが、密教思想の総合的な性格である。

更に空海は、真言密教思想の体系化において、十住心思想や即身成仏思想を構築し、仏教の思想を深化させた。それは、「仏教の統一理論構築」とも言えるのではないだろうか。

おわりに

散りばめられた事象をまとめたという「統一理論構築への期待」は、おそらく人が持つ本能であろう。

現在、物理学の世界では、「力の統一理論」構築が最先端の研究のひとつとなっている。重力と電磁力と強い

力、そして、弱い力、宇宙に存在が確認されているこの四つの力の理論の統一である。力とは、存在であり、エネルギーであり、更には、場であり、物理学の上での象徴である。この統一理論が構築されれば、「物理学において宇宙を説明するために象徴として用いられている四つの力」が、ひとつの理論のもと、密教における大日如来のように説かれることが期待されるのである。

以上述べたように、空海は仏教の統一理論構築という使命のもと、『般若心経』の中に密教性を見出した。これは、密教のもつ性格とはいえ、当時の顕教家からしてみれば、「『般若心経』までも」という危機感を懐いたに違いない。

空海は最晩年に、この『般若心経秘鍵』を撰述されたという。どのような想いで書かれたかは今となっては知るよしもないが、おそらく、将来の統一された仏教に思いを馳せ、全てを包容する微笑みをもって筆を進めたに違いないであろう。